

ボランティアプログラム

事業名	AOYAMA Green Up Project
日時	2022年4月23日(土) 14:00～16:00
場所	青山キャンパス周辺および17606教室
参加人数	計12名(参加学生6名*、学生団体メンバー6名)* 事前申し込みは8名
内容	体験的なボランティア活動として青山キャンパス周辺のごみ拾い活動を行った。 活動後には教室に場を移し、参加者やグリーンバードメンバー間で振り返りや交流を行った。
成果	昨年、一昨年とコロナ禍で学生同士の交流を促進させる目的で実施。 主に対象者は新入生であったが、今回の参加者は4年生2名、2年生3名、1年生3名という内訳であった。 活動後の感想は次の通り： ー ボランティアはもっと真面目にしっかり行わなければいけないという先入観があったが、今回参加して、意外と気軽に参加できるということを知った ー 就活も終わり卒業を待つだけなので新しいことにチャレンジしてみたかった。気軽に楽しんで活動できてよかった
協力団体	グリーンバード青山学院大学ゴミ拾い愛好会



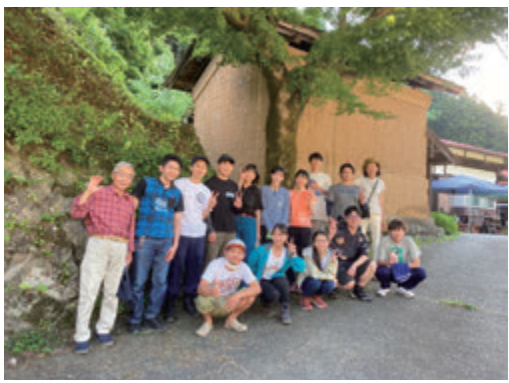
事業名	相武台団地活性化プロジェクト
日時	① 2022年6月下旬～2023年3月22日(水) 事業所での活動 ② 2022年7月～2023年3月 第3または第4水曜 18:00～19:30 オンラインミーティング ③ 2022年10月25日(火) 18:30～20:00 認知症サポーター養成講座にて活動発表 ④ 2023年12月2日(金) 13:00～15:00 相模原市共和中学校にて福祉体験講座に登壇 ⑤ 2023年3月11日(土) 相武台団地商店街 防災フェスタへ参画
場所	認知症対応型デイサービスおとなり / オンライン / 相模原キャンパス / 相模原市共和中学校
参加人数	10名(プロジェクトメンバー7名、学生スタッフ3名)
内容	学生一人あたり1～2回/週の頻度で受入先での活動を続けた。また活動のアウトプットとして、認知症サポーター養成講座や共和中学校の福祉体験講座に参加した。また12月には受入先にて自主企画(クリスマスツリー用のオーナメントの制作)を行い、ご利用者とのレクリエーション活動を進めた。3月の防災フェスタでは、これまでの地域での活動をもとにして防災に関するゲームを作成した。
成果	プロジェクトメンバーの活動日数、時間ともに他事業と比較して多いプロジェクトであり(活動日数259日、活動時間591時間)、また相模原祭に出展するなど継続性と主体性が高く、学生にとっては満足度の高い活動であるといえる。 事業の性質上、学生の満足度に加え、地域のニーズにあった活動であったか、住民等からの評価も成果のポイントとしてあげられるため、次年度は学生の自主的な企画等の地域からのフィードバックについても検討したい。

協 力 団 体	認知症対応型デイサービスおとなり
  	

事 業 名	カンボジア日本語サロン
日 時	①マンゴースクール 毎月 1 回実施 (木曜日 19 ～ 20 時) 2021 年 9 月から継続 ②くっくま孤児院 毎月 2 回実施 (月曜日 12 ～ 13 時) 2021 年 10 月から継続
場 所	オンライン (Zoom)
参 加 人 数	毎回 ① 5 名 ② 4 名
内 容	①シェムリアップ近郊の農村エリアにあるフリースクール (Globe Jungle 運営) の先生方に向けた日本語会話レッスン活動、異文化交流。 ②プノンベン孤児院 (Globe Jungle 運営) の子どもたちに向けた日本語読み書きレッスン活動
成 果	コロナ禍で開始した海外とのリモート活動が 1 年以上継続し、学生とカンボジア現地の人々や Globe Jungle スタッフとの関係構築もできつつある。限られた学生メンバーであるものの継続的な関わりを持つことによって、カンボジア側の理解度や希望を取り入れた授業内容の工夫や新たな試みが毎回実施されている。今年度から孤児院の子どもを対象とした活動も始まり、Globe Jungle スタッフとの対話を通して孤児院の子どもたちや社会的背景、日本語を学ぶ意義についても理解を深める場となっている。
協 力 団 体	NPO 法人 Globe Jungle

事業名	なな山緑地活性化プロジェクト
日時	2023年1月8日(日)、2月12日(日) 9:00～16:00 2023年1月21日(土) 10:00～12:30
場所	なな山緑地(東京都多摩市)
参加人数	1月8日:6名、1月21日:2名、2月12日:2名の述べ10名
内容	なな山緑地の維持保全のための環境整備活動を今年度も継続して実施。落ち葉掃きや落ち葉溜めの修繕、伐木の片付け、下草刈りなどを行った。
成果	緑地の会メンバーと打ち合わせを重ね、リピーター学生が増えるよう活動の位置づけを変更した。1月の活動後は、緑地の会と学生で「今後のなな山」について意見交換を行ったことによりコミュニケーションが促進され、「受け入れ側」と「参加者」ではなく、顔と名前で呼び合う「個」同士が繋がる関係性へと発展することができた。また、定期活動以外で近隣小学校の自然観察会にも本学生2名が有志で加わった。2月の活動ではチェーンソーを使用した伐木作業風景も見学し、グリーンボランティア活動における安全管理面も学習することができた。 次年度も継続してこのプロジェクトに関わる意思を示す学生もいることから、次年度は作業だけでなく、里山の資源(シノダケや伐木)を活用した伝統工芸品づくりにも本プロジェクトとして関わっていきたい。
協力団体	なな山緑地の会



事業名	藤野プロジェクト
日時	【里山体験ツアー】 ① 2022 年 6 月 25 日（土）9:30 ～ 16:00 / ② 2022 年 10 月 22 日（土）9:30 ～ 16:00 【しのばら園芸市ボランティア】 ① 2022 年 12 月 11 日（土）9:30 ～ 16:30 / ② 2023 年 1 月 18 日（水）19:00 ～ 20:30 ③ 2023 年 3 月 4 日（土）9:30 ～ 16:30
場所	相模原市緑区藤野地域（綱子地区、牧野）
参加人数	【里山体験ツアー】 ① 10 名 ② 9 名（申込 10 名） 【しのばら園芸市ボランティア】 ①～③ 5 名（全て同じ学生）
内容	“ 芸術のまち ” “ 都心に一番近い里山 ” といった名称をもつ相模原市緑区藤野（旧津久井郡藤野町）について知り、青学生の地域に根差した社会貢献活動を広げていくことを目的としたプロジェクト。里山体験ツアーについては、受入宅の所有する山地にて環境保全の為の間伐体験やツリーハウスの見学、芸術によるまちおこしを担ってきた方のお宅では藍染め体験や藤野の魅力を語っていただく場を設けた。 しのばら園芸市ボランティアについては、2023 年春に篠原地区にて初めて開催される園芸市へ向け、しのばら園芸市実行委員会の方々とともに会場づくりや資材の引取り、商品のアイデア出しなどを行なった。
成果	里山体験ツアーについては昨年度に引き続いての開催となり、活動内容の選定から日程調整に至るまで藤野観光協会様のご協力のもとでスムーズに進んだ。また地域の市民活動団体を紹介いただき、次年度の活動先候補として連携を深めていく機会をいただいた。 しのばら園芸市ボランティアについては、本プロジェクトの取り組みの 1 つである藤野特産品の販売（地産ガチャ）でご協力いただいている武笠太郎氏からのお声がけから始まった。地域活性化の要素を含んでいるイベントを地域の方々と創り上げていく貴重な体験が含まれており、本プロジェクトの柱となる活動へ発展することが期待できる。 藤野プロジェクト全体としては、里山体験ツアーに代表される 1day 型のイベントを入口に、しのばら園芸市ボランティアや「森のイノベーションラボ FUJINO」（藤野駅前テレワーク拠点）主催のプロジェクトへの参画など、地域住民との協働を学生が選択できるように設計し、継続性のある取り組みへと発展することを目指していきたい。
協力団体	藤野観光協会、しのばら園芸市実行委員会
  	

事業名	青山学院大学子ども体験・見学企画
日時	2022年7月2日(土) 11:00～13:00
場所	相模原キャンパス
参加人数	中学生3名、放課後等デイサービス職員2名、本学学生6名、コーディネーター1名
内容	地域子どもたちを大学に招き、大学見学と学生との交流を通じて大学についての理解を深めてもらうこと、また学生にとっては地域子どもたちと接することで地域活動や地域へ意識を向けるきっかけとするための活動とした。さらに、内容の企画及び準備については学生が中心となって進めることで企画立案、準備、実施、事後報告という一連の流れを運営側の学生に経験させる機会とした。 今回は企画学生が普段接している軽度発達障害を持つ中学生を対象に招待した。実施した内容は以下の通りである。 ・学生による相模原キャンパスツアー ・疑似大学生体験（学食での食券購入・食事、教室でのディベート体験）
成果	軽度発達障害を持つ子どもたちは学校に対してネガティブなイメージを持っていることも多く、大学進学を考えることが少ないという企画学生の問題意識を基に、普段企画学生が接している放課後等デイサービス子どもたちを相模原キャンパスに招いたが、大学生と接することで大学を楽しい場であるという印象を持ってもらったことがアンケートの回答からうかがえた。大学進学という選択肢もあると意識してもらえる機会となったといえる。 また、企画運営側として参加した学生たちにとっては、企画書を作り大学側に企画を認めてもらうことの難しさを知り、準備や当日の運営、事後報告等イベントを実施する際の一通りの流れを経験することができた。さらに軽度発達障害を持つ子どもとの接し方や地域と関わることもについても考えるきっかけとなり、学生たちの学びにつながったといえる。
 	

事業名	もしもプロジェクト青学
日時	① 2022年7月3日(日) 10:00～16:00 ② 2022年9月3日(土)・4日(日) 10:00～18:00 ③ 2022年12月9日(金)及び12日(月) 12:30～13:20 ④ 2022年12月21日(水) 13:20～14:50 ⑤ 2023年3月11日(土)・12日(日)
場所	① 東京臨海広域防災公園そなエリア ② 代々木公園野外ステージ付近 ③ 青山キャンパス 17303 教室 ④ 青山キャンパス 17408 教室 ⑤ 岩手県大船渡市三陸地区公民館
参加人数	① 6名 ② CECブース 青学生4名、当日ボランティア22名 ③ 計7名 ④ 17名(内訳:青学生6名、職員2名、他大学生5名、その他1名、プロジェクトメンバー3名) ⑤ 2名

内 容	①防災クイズ&ゲーム Day2022 への出展 一般財団法人防災教育普及協会が主催する防災企画に青学生が出展。参加者に向けて防災謎解きゲームを披露した。 ②もしもフェス渋谷 2022 への出展 代々木公園で行われた総合防災イベントに CEC として出展し、もしもプロジェクト青学チームが防災縁日コンテンツを展開。来場者には防災クイズに答えてもらい、正解者は輪投げにチャレンジ。輪が入った人には景品として青学カレーや防災食（学院提供）、ボールペンを配布した。また、2011 年 3 月 11 日、青山学院が帰宅困難者受入施設を開所した風景もポスターとして展示した。 ③防災ランチ会 学生発案の企画として学内で防災イベントを開催。 「もしもスクール」と題する防災トークイベントをメインにプレ企画として学生の昼休みを利用し防災ランチ会を実施した。 ④もしもスクール もしもスクールは 2 部構成とし、1 部では NHK 職員の方に災害報道のリアルな話や記者としての業務内容の他、スマホを使って自分の住む地域の災害リスクを調べるワークも行い、災害を身近に感じるきっかけとなった。2 部では岩手県の被災地でコミュニティ再建活動を行っている学生ボランティア団体の学生とクロストークという形で進行し、主に東日本大震災の教訓や学生たちに向けたメッセージが発信された。 ⑤ 3.11 企画「未来を灯そう」イベント出展 もしもスクールでコラボした学生団体 Youth for Ofunato と連携協力し、岩手県大船渡市越喜来地区の活性化協議会が主催した追悼イベントにて防災啓発ポスターの展示を行った。
成 果	①ゲームの内容は、あと 20 分で首都直下地震が発生するという設定の中、謎解きで埋められた防災マニュアルを完成させるというもの。参加者からは「普段から防災に取り組んでいる身としては逆に難しく、楽しく防災知識を身に付けてもらうためにはちょうど良い内容のゲームであった」との感想が寄せられた。 ②フェス実行委員会の公式発表では 2 万人が来場。 CEC ブースには 2 日間で約 500 名が訪れ、クイズや輪投げを楽しんでもらった。東日本大震災発災から 16 時間の経過をまとめた展示ポスターの前では、立ち止まってじっくり眺める方がいたり、CEC について尋ねてくれた方もいた。杉並区在住の自治会メンバーからは青学の防災対策を地域でも応用したいとの感想が寄せられ、青学や CEC の社会的価値を高めるよい機会となった。 また、フェスの 2 日間は当日ボランティアも募集し、青学から 22 名、日本財団ボラセンから 39 名ほどの計 60 名近い当日ボランティアがフェスの運営に携わった。 ブース出展の準備段階においては学院総務部安全対策課から防災食（非常用クッキー 600 食、フリーズドライピラフ 300 食）や 3.11 時の学院資料を提供してもらった。 ③防災ランチ会は昼休みという短い時間だったこともあり、参加者は限定的であったが少人数で気軽に話が出来、もしもスクールを告知する良い機会となった。 ④一方、もしもスクールは学外からの参加者も半数ほど占め、その多くは災害報道や NHK への就職に関心を持つ他大学生たちであった。 参加者と登壇者が近い距離での実施だったため、双方向のコミュニケーションが促進され、活発な意見交換がなされた。NHK 側からも引き続き防災面で青学とコラボしていきたいという意向が示され、次回の企画立案に向けて良き関係性を構築することが出来た。 ⑤渋谷や学内で活動する学生メンバーにとって、初の被災地での活動ということもあり、若干、展示内容が追悼イベントの趣旨や来場者のニーズと合致しなかったが、地域の方と対話し交流する過程での多くの学びを得ることができた。
協力団体	①一般財団法人防災教育普及協会 ②もしもフェス実行委員会（もしもプロジェクト主催・渋谷区共催） ④NHK メディア総局 展開センター防災・復興支援グループ、学生団体 Youth for Ofunato ⑤越喜来活性化協議会、いわて連携復興センター、学生団体 Youth for Ofunato



事業名	広尾中学校アフタースクールボランティア
日時	2022年6月15日～2023年3月31日
場所	渋谷区立広尾中学校校内
参加人数	13名程度
内容	渋谷区立広尾中学校にて、NPO法人ピアサポートネットしづやが実施する「広尾アフタースクール」に青学生がボランティアとして参加。6月中旬から毎週水曜日に年間通じて定期的に活動を行った。
成果	「広尾アフタースクール」の取り組み自体が実施中学校でも初めての取り組みであり、初年度参加した生徒数も数としては想定よりも少ないものであったが、継続的に参加をしていた生徒と学生ボランティアの間には、フラットな関係性が構築されており、毎回の活動を楽しみに参加している様子が見受けられた。 また、後期には「こども・若者支援研修」を学内で実施し、支援を必要としているこどもや若者の現状を学ぶことで、本活動の実践へと活かす機会となった。
協力団体	NPO法人ピアサポートネットしづや、渋谷区立広尾中学校

事業名	渋谷区こどもテーブルボランティア
日時	2022年4月1日～2023年3月31日（通年）
場所	各こどもテーブル活動先
参加人数	申込件数 27 件
内容	渋谷区社会福祉協議会が運営する渋谷区こどもテーブルの活動先 17 か所に対する学生ボランティア募集の告知協力と学生のボランティア希望に対する連絡調整等コーディネートを行った。 ＜活動紹介先＞ なつつの木、代々木こどもテーブル～春の小川～、ゆめとぴあマルシェ、恵比寿じもと食堂、上富ダイニング、子どもと一緒に遊び隊、みんなの世界テーブル、みんなの食卓、恵比寿ママ食堂、ささはたっこ、みらい区、森のゆうゆう＆アトリエゆうゆう with オリセン、渋谷おやこサロン、パール子どもテーブル活動、Mama's kitchen、なな色カフェ、おんがく な・か・ま
共催団体	渋谷区社会福祉協議会



イベント

事業名	学生ボランティア団体合同説明会
日時	青山キャンパス：4月6日（水）15：30～17：30 相模原キャンパス：4月8日（金）16：00～17：30
場所	青山キャンパス：17510 相模原キャンパス：F307
参加人数	青山キャンパス：計96名（参加学生59名、学生団体メンバー37名） 相模原キャンパス：計47名（参加学生37名、学生団体メンバー7名、学生スタッフ3名）
内容	例年同様、青山、相模原両キャンパスで対面形式による合同説明会を開催した。AOYAMA ボランティアネットワークに加盟している学生団体の中で希望を取り、説明会当日は青山9団体、相模原3団体が当日は活動紹介を行った後、個別相談対応した。 青山キャンパス参加団体： SANDS、TsunAGU ボランティア愛好会、しぶっこ、青山子ども会、Youth for Ofunato、グリーンバード青学支部、動物愛護団体きすあに、MF3.11 東北応援愛好会、アイセック青学支部 相模原キャンパス参加団体： SIVA ボランティア愛好会、fan × fun 学生ボランティア愛好会、アイセック青学支部
成果	開催日の設定時期からか例年の2/3～1/2程度の参加者数であった。しかし、参加者たちは熱心にボランティア団体の活動紹介に耳を傾け、各ブースもそれなりににぎわっていた。説明会終了後、ボランティア団体と行った振り返りではもっと幅広く団体を知ってもらうための改善策（参加団体のプロフィールを予め告知、資料や団体SNSサイトをパッケージ化して配布）などが提言され、次年度に向けてより学生団体が主体的に関わっていくための足がかりがつかめた。



(青山キャンパス)



(相模原キャンパス)



事業名	こどもテーブルボランティア交流会
日時	2022年7月6日(水)13:30～14:50
場所	青山キャンパス 17号館 17407 教室
参加人数	6名
内容	こどもテーブルボランティア経験者とこどもテーブルボランティアに関心のある学生同士の交流会を実施。学生団体しづこのメンバーを中心にこどもテーブルでのボランティア経験談を参加者間で共有。未参加の学生はボランティアの参加方法や活動にあたっての不安などを共有する機会となった。
成果	参加者は少なかったが、一人ひとりの発言機会があり密な交流機会となった。こどもテーブルへの関心は高まったが、実際の申し込みにはつながっていない。後期も定期的に開催を検討。
協力団体	青山学院大学学生ボランティア団体しづこ

事業名	ボランティアカフェ（ボラカフェ）
日時	① 2022年5月26日(木) 12:35～13:15 ② 2022年8月1日(月) 13:10～14:40 ③ 2022年10月14日(金) 12:35～13:15 ④ 2022年12月14日(水) 18:30～20:00 ⑤ 2023年3月23日(木) 13:00～14:00
場所	オンライン
参加人数	① 7名(申込 11名) ② 14名(申込 22名) ③ 7名(申込 11名) ④ 9名(申込 10名) ⑤ 19名(申込 27名)
内容	①発達障害を持つ子どもの居場所作り等に取り組んでいる NPO 法人ジョガボーラの森久保氏にお越しいただき、キャリア形成へつながった「スポーツ」「海外」「ボランティア」をキーワードに、課外活動への取り組み方やライフワークの探し方・向き合い方について語っていただいた。 ②ウクライナにて取材活動を行ってきた森佑一氏にお越しいただき、ドキュメンタリー写真家の視点から見えてきた現地の暮らしとボランティアについて、写真を交えてお話いただいた。 ③国際協力 NGO ブリッジエーシアジャパンの事務局長新石氏にミャンマー北西部で行っている裁縫教室を通じた民族融和のための支援事業についてお話いただき、最後は同団体でボランティア活動を行っている本学学生の体験談を語っていただいた。 ④ウクライナ避難民の受け入れや日本での生活の支援等の活動を行っているロンドン大学 SOAS (東洋アフリカ学院) 修士課程の山崎氏にウクライナ支援についてのミニレクチャーをしていただき、その後学生同士のディスカッションを行った。 ⑤失語症の症状やリハビリ方法、失語症を持つ人とのコミュニケーションの取り方などについて、言語聴覚士の川本氏にお話いただいた。
成果	①学生時代にサッカーに明け暮れた日々の話や、趣味が高じて海外へ渡り、帰国後はボランティアとして地域の選手育成に携わりながらキャリアを重ねたことなど、様々なエピソードが現在の子どもの居場所づくりや、オンラインによる若者の学びの場運営といったユニークな活動につながっていったことが興味深く伝えられ、新学期となり新しいことにチャレンジしたい学生にとって、とても刺激になる内容だった。 ②戦時下の日常や戦争の爪痕、ボランティア活動といったメディアでは取り上げられることの少ないリアルな情報を共有いただいた。参加者には本件に関心のある学生・教職員に加えて、日本財団主催のウクライナ避難民支援ボランティアに参加した学生や、本学国際センター長も参加されており、今後のウクライナ支援の企画を考える機会にも繋がった。 ③参加者たちは一般にはあまり知られていないミャンマーの国情報や少数民族について学んだ。アンケート回答があった2名はいずれも「とても満足」を選択。参加者の中には Study for Two 青学で活動する学生もあり、終了後、今回のボラカフェで得た知識を団体の Instagram で発信していた。

成果	④今回の企画は学生の発案から始まっており、企画・準備段階を通して企画者の学生が成長できたことが最大の成果であるが、10月1日に当センター主催で実施したウクライナ避難民支援ボランティアの報告会「ウクライナ支援について考える～学生のボランティア活動の経験から～」に参加した学生が、このような企画を立案し実施に導くことができたという意味で、今回のボラカフェは同報告会の成果の一つともいえる。 ⑤失語症の症状や失語症になる背景、認知症との関係等、失語症の基本的な情報や言語聴覚士の仕事について、また失語症を持つ方との接し方や、ボランティアとして関われる方法についてお話いただいた。事前の質問も複数来ており、また終了後のアンケートの回収率も高く、非常に多くのコメントが寄せられた。春休み期間中にもかかわらず多くの学生・教職員の参加があり、今年度のボラカフェとしては最多の参加者数となった。失語症や言語聴覚士についての関心の高さがうかがえた。
協力団体／協力者	① NPO 法人 ジョガボーラ 森久保憲秀氏 ②ドキュメンタリー写真家 森佑一氏 ③認定 NPO 法人 ブリッジエーシアジャパン ④社会情報学部 4 年 鈴木綾花氏、 ロンドン大学 SOAS 修士課程 山崎有紗氏 ⑤小平中央リハビリテーション病院 言語聴覚士 川本規恵氏



事業名	こどもテーブルを知ろう！
日時	2022年8月9日(火)11:00～12:30
場所	オンライン (Zoom)
参加人数	7名 (申込 10名)
内 容	青山学院大学学部生・院生を対象に、こどもテーブル事業とそのボランティア活動について知り、学生と団体がつながる機会として開催。 渋谷区社会福祉協議会による渋谷区こどもテーブル事業の説明、こどもテーブル3団体（みんなの世界テーブル、なつつの木、代々木ゆうゆう with オリセン）によるそれぞれの団体の特色を踏まえた活動紹介のあと、ブレイクアウトルームによる分科会形式で団体と学生が質疑する3つの構成で実施した。
成 果	これまで一つの団体による活動紹介の場としてきたが、今回は3団体が参加したことで、各こどもテーブル活動の実施主体や活動内容の多様さが学生にとっても伝わりやすいものとなった。夏期休暇期間の活動機会の提供として団体からも活動紹介があったが、参加者からの申し込みは若干数に留まっている他、これまでと比較してイベントへの参加者も少ないため開催時期や広報については再度検討が必要と考える。
協力団体	渋谷区社会福祉協議会、みんなの世界テーブル、なつつの木、代々木ゆうゆう、オリンピック記念センター

事業名	作ろう！Myらぶらび
日時	2022年10月29日(土)10:00～15:00
場所	青山キャンパス CEC 内にて対面開催
参加人数	60名（青学大生 15、教職員 5、設置学校 2、一般 38） 学生ボランティア（彩プロジェクトメンバー）7名 NPO 法人ぱれっと職員 2名、利用メンバー 3名 BEAMS 社員 3名
内 容	S-SAP 協定に基づいた渋谷区内の企業（BEAMS）連携、地域の知的障害者支援福祉施設（ぱれっと）との協力によって、らぶらび（うさぎのマスコット）作りワークショップを初めて実施した。BEAMS からの、らぶらびの材料となるリサイクル衣料品の提供とアップサイクルデザイナーの参加、ぱれっとからはらぶらび作りのノウハウを協力いただき、学内外からの参加者が思い思いのらぶらび作りを楽しめるワークショップを行った。
成 果	青山祭開催中ということもあり、新しく始動した彩プロジェクトメンバー学生による広報物作成や当日の案内によって、大変賑わいのある場となった。特に子どもや親子で楽しむ参加者が終始途切れることがなく、らぶらび作りを通して関係者とも交流をはかる機会となった。また、参加者にぱれっとの取り組みを知ってもらうことや、ぱれっとの利用メンバーにとっても地域での社会参加の場として、学生との関わりを持つ等有意義な企画実施となった。
協力団体	共催：NPO 法人ぱれっと、協力：株式会社 BEAMS、一般社団法人シブヤフロント



事業名	ヒューマンライブラリー@青学
日時	11月19日(土)13:00～16:00
場所	青山キャンパス1号館1階ラウンジ
参加人数	延べ人数 26名(参加学生17名、教職員6名、外部3名)
内容	2022年6月の「ヒューマンライブラリー入門講座」から発足した「ヒューマンライブラリー学生司書プロジェクト」による「ヒューマンライブラリー@青学」を学内にて実施した。 ゲストには、それぞれの「ポリアモリー」「発達障がい」「元受刑者」「外国ルーツ」「クレプトマニア・摂食障がい・Xジェンダー」と、それぞれ多様なカテゴリーの方に「本」役として参加いただき、学生(読者)との対話を行った。 また、企画にはももとのプロジェクト参加学生5名のほか、彩プロジェクトのメンバー2名と学生スタッフ1名が合流し、企画提案や当日の補助として参加した。
成果	少人数での対話を醍醐味とした本企画において、当日の参加人数としてはちょうどよい規模感であった。 参加者のアンケートからは、参加前と参加後での変化について、大きなカテゴリーによる画一的な枠組みとしての捉え方が、対話を通じたことで、その個性や生きづらさの背景にある課題に気付くきっかけになったことが分かる。 また、自身も障がいのある学生が、障がいのある「本」との対話を通じて、その人生観や障がいの受け止め方に学びを得る瞬間があったことも、本企画の意義と考える。 運営に関わった学生たちにとっては、企画段階からマイノリティに関する調査や外部イベントへの参加、ゲストとの事前打ち合わせや調整、広報物作成など、運営に深く関わることで、より実践的な多様性理解に対する学びの機会となった。
協力団体	当日の「本」役5名(きのこさん、yummyさん、パンダさん、おちゆにさん、悠さん)
 イベントフライヤー  「本」のあらすじ	



会場の様子（全体）



受付



対話セッションの様子



「本」「読者」「司書」集合写真

事業名	障がい WEEK
日時	2022 年 12 月 9 日（土）～ 12 月 21 日（水）
場所	青山キャンパス一号館学生ラウンジ、17 号館 17501 教室
参加人数	＜手話コミュニケーション講座＞ 17 名 ＜ユニバーサルマナー検定 3 級＞ 33 名（学生 29 名、教職員 4 名）
内容	国が定める障害者週間の期間に合わせ、学内の障がい理解や啓発を目的としたイベントを下記の通り実施した。 ＜手話コミュニケーション講座＞ 12/10(土)14:30～16:00 講師のあ～とん塾スタッフや塾生と手話を使ったゲームやクイズを通じて簡単な手話表現を学び、音が聞こえる聞こえない関係なくコミュニケーションを取ることができる楽しさを学んだ。講座後は青学手話部によるキャンパスツアーを行い、塾生の子どもたちに大学の雰囲気を知ってもらう取り組みを行った。 ＜ユニバーサルマナー検定 3 級＞ 12/12(月)18:30～20:30 「障害」の理解や配慮を必要としている方への配慮の方法や考え方など、講師による講演と参加者同士のディスカッションから学ぶ。3 級検定受講料 5,500 円のうち 2,500 円分の補助を行った。 ＜企画展＞ 12/12(月)～12/16(金) 学生ラウンジにてアート作品を展示し多くの学生、教職員にシブヤフォントや金沢アートの活動を知ってもらう場を提供した。 ＜ユニバーサルデザイン体験会＞ 12/14(水)・15(木) 13:20～16:35 障がい学生支援センターの企画として実施。企画展展示会場にブースを設置し、点字作成や車いす、ノートテイク体験など、障がいのある人への情報保障の取り組みや必要性を学ぶ機会とした。

成 果	<手話コミュニケーション講座> あ〜とん塾の塾生から簡単な手話表現を教わり、それをもとにしたチーム対抗型のゲームを行ったことで、参加者一人ひとりの積極性が感じられた。キャンパスツアーでは、手話部にとっても、部外の聴覚障がいのある人たちと関わる初めての機会ということで貴重な経験とすることができた。 <ユニバーサルマナー検定 3 級> グループディスカッションやチーム対抗型ワークによって参加者間の盛り上がりが見られた。アンケートからも、まちの中で必要な配慮とその気付きや声掛けに必要なマインドが身についたという声が多く得られた。 <企画展> ラウンジを通りかかる学生や教職員が各々作品を眺め、シブヤフォントや金沢アートへ関心を寄せていた。自身のブログに展示をアップしたいと窓口に来る学生もいた。設営には彩プロジェクトのメンバーが参加した。 <ユニバーサルデザイン体験会> 参加者自体が少なく、実施する曜日や時間帯は検討が必要。障がい学生支援センターの学生サポーターが複数参加していたため、CEC 学生スタッフやセンターとつながりのある学生も参加することで、相互の取り組みの刺激になることを期待したが、学生間の都合が合わず実現はしなかった。
協 力 団 体	<ユニバーサルマナー検定 3 級> 一般社団法人ユニバーサルマナー協会 <手話コミュニケーション講座> 一般社団法人ありがとうの種「手話でいきる子どものあ〜とん塾」、青山学院大学手話部 <企画展> 金沢アート工房、フクフクプラス <ユニバーサルデザイン体験会> 障がい学生支援センター
実 施 風 景	* 手話コミュニケーション講座 

事業名	学生ボランティア・フォーラム
日時	2023年3月3日（金）11:00～12:30
場所	青山キャンパス総研ビル（14号館）第19会議室
参加人数	28名（参加者10名、発表者9名、運営9名） 属性：学生14名、青学教職員8名、学外の方6名
内容	2022年度にセンター主催プログラムやボラサポ制度、サービス・ラーニング科目を通じて社会貢献活動に携わった学生による成果報告会を実施した。 学生発表は次の通り。 <センター主催プロジェクト> 彩りプロジェクト学生メンバー 相武台団地活性化プロジェクト学生メンバー <ボランティア・社会貢献プロジェクト・サポート制度> スタートアップコース採択プロジェクト ステップアップコース採択プロジェクト <サービス・ラーニング科目> SLⅠ（グローバル時代の社会課題－国際協力の取り組みから体得する－） SLⅢ（カンボジア・サービス・ラーニング・ツアーを通してサービスを学ぶ） SLⅡ（ソーシャルビジネスの実践から学ぶ）
成果	シビックエンゲージメントセンター開設以来、初の学生報告会となった。 時間の都合上、限られた学生のみでの発表であったが、発表した7名の学生たちは2か月間の準備期間を経て、本番に臨んだことで活動後の良い振り返りの機会となった。フォーラム終了後の発表学生の主な感想は次のとおり。 ・活動内容は異なっても底辺にある志は皆同じだと感じた ・活動中は自分のことで精いっぱいだが、他の活動方向も聞けて視野が広がった ・今後協働できそうな活動を知ることができ、有意義だった ・今回のフォーラム自体も活動の一部として団体広報していきたい 当日は学生の活動先の団体や他大学のボランティア担当者の参加もあり学外者との関係構築のいいきっかけとなった



ソーシャルビジネス

事業名	藤野特産品（地産ガチャ）
場所	相模原キャンパス購買会
内容	“芸術のまち” “都心に一番近い里山” といった名称をもつ相模原市緑区藤野（旧津久井郡藤野町）について知り、青学生の地域に根差した社会貢献活動を広げていくことを目的とした「藤野プロジェクト」を2021年度から実施しており、藤野の魅力を知る機会として、購買会に地産ガチャ（藤野地域の特産品が詰められたカプセルトイマシン）を6台設置。また、試験的にシビックエンゲージメントセンター内に小型のカプセルトイマシンを設置した。
成果	2年目となった2022年度は、2022年末の回収時点で281個の商品が売れており、昨年度と同等の人気のまま継続している。新商品として「丸太」「おばあちゃんが描いた猫」等がラインナップされ、注目を集めているようだった。シビックエンゲージメントセンターに設置したカプセルトイについては、主にセンターのノベルティを中身に詰めているが、今後はプロジェクト参加学生の協力をもらいながら、魅力的な青学オリジナルのガチャを開発することを検討している。
協力者	地産ガチャ開発人（株式会社ザリガニワークス） 武笠太郎氏
 	

事業名	シブヤフォント、金沢アウトサイダー・アート・プロジェクトとの協働
内容	優れた芸術的な才能を持つ、障害のある方への支援の一環として渋谷区や金沢市が取り組んでいるアート・プロジェクトとの協働として、シビックエンゲージメントセンターでは、アーティストの創作活動や自立のための仕組み作りへの寄付となるペーパーコースターを紹介した。今年は学内購買会に加え、障がいWEEK期間中（12/12～16）に原画展示を行った。
* 企画展のアート展示（シブヤフォント、金沢アート） 	

講座・セミナー

事業名	災害救援ボランティア講座
日時	2022年5月14日(土)、21日(土)、22日(日) 9:00～17:00
場所	14日、21日：青山キャンパス 17411、22日：午前中 池袋防災館、午後 青山キャンパス 14509
参加人数	18名（セーフティリーダー認定証付与 18名、上級救命技能認定証付与 17名）
内容	災害時のボランティアリーダーを育成する目的で毎年実施。上級救命技能講習もカリキュラムに含めた3日間のコースで実施した。1日目の座学においては渋谷区危機管理対策部や社会福祉協議会、学院総務部、渋谷消防署、渋谷警察署に協力を仰ぎ、各組織の平時の取り組みと災害時の役割について講話いただいた。 【1日目】 －災害救援ボランティアの基本（澤野次郎氏 / 災害救援ボランティア推進委員会） －区の取り組み、災害ボランティアセンターについて（渋谷区役所、渋谷区社会福祉協議会） －大学の初期対応（青山学院大学） －帰宅・滞留行動シミュレーション －火災発生時の対応（渋谷消防署） －警察の災害対応と防災対策（警視庁災害対策課） 【2日目】 －上級救命技能講習 【3日目】 －災害模擬体験と実技 －災害ボランティアの安全衛生と被災された方との接し方 －災害ボランティア活動ケースワーク －避難所運営支援総合演習
成果	3年ぶりにすべてのカリキュラムを対面実施で通常通りの形式で開催することが出来た。受講後アンケートでは約9割の学生が「とても満足」「満足」と回答し、全員が「今後災害時に行動できる」と回答していることから本講座の実用性は高いと判断できる。災害救援は継続的に意識し続けることが大切なため、継続的な研修機会の提供を望む声もあった。
協力団体	災害救援ボランティア推進委員会



事業名	認知症サポーター養成講座
日時	前期：2022年5月30日(月) 18:30～20:00 後期：2022年10月25日(火) 18:30～20:00
場所	前期：青山キャンパス 17号館 17406 教室 後期：相模原キャンパス F棟 F310 教室
参加人数	前期：19名（うち教職員3名） 後期：15名（うち教職員1名）

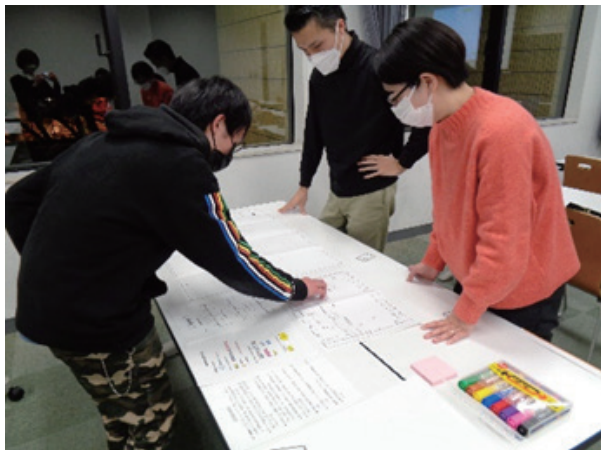
内 容	認知症を正しく理解し知識を身に着けるための講座として、今年で4回目の開催。対面による開催で、ロールプレイを通して学生にとって身近な課題として理解が深まる内容となった。後期の回では「相武台団地活性化プロジェクト」で認知症対応型デイサービスでボランティアとして活動している学生からの報告も行った。
成 果	アンケート回答から、ほとんどの参加者にとって満足度の高い講座となった。講座終了後には講師のもとへ相談に行く学生の姿も見られ関心の高さも窺えた。コロナが落ち着き始めたこともあり、青山所属で講座を受講した学生が活動できる場の開拓を目下の取り組みとしたい。
協 力 団 体	前期：認知症ケア実践者ネットワーク Link 東京 木村誠氏 後期：認知症対応型デイサービス おとなり（株式会社ファイブスター）、友知草の会、相模原市社会福祉協議会
共 催 団 体	全国キャラバンメイト連絡協議会
	

事 業 名	国際協力プランナー入門
日 時	2022年9月14日（水）・15日（木）10:00～17:00
場 所	青山キャンパス 17号館 17512
参 加 人 数	18名（申込者23名のうち、5名が病欠）
内 容	2019年度から実施している国際協力プロジェクトを企画するための座学と実践的ワークショップを組み合わせた2日間の研修を今年も実施。 内容はSDGsの導入講義に始まり、国際協力を担う関係者（アクター）やロジックモデルを用いたプロジェクトマネジメントの枠組みを学びながら、架空のケースに沿ってチームごとに企画会議を行い、最後にアクションプランを完成させるというもの。ゲストスピーカーにはフェアトレードショップの運営者、JICAの教育プロジェクトを実施する開発コンサルタント、日本で在日外国人向け保育園を開設した在住ネパール人の方、ケニアで教育開発プロジェクトを担当していたNGOスタッフを招いてそれぞれ講話いただいた。予定したカリキュラムを修了した18名の学生には修了証を発行した。
成 果	学部1年生から大学院生までSDGsや国際協力に高い関心を持つ学生が集い、グループワークを重ねるごとに議論が活発化し、全体的に活気のある研修となった。また、今年は運営メンバーとして協力NGOの学生インターン（法政大）2名が加わり、学生間の交流も促進された。 グループワークの進め方はグループごとに個性が表れ、PCやスマホで基本情報を徹底的に調べるグループや、毎回、前回までのワークに立ち戻って進めていくグループなどがいた。なお、昨年回収率の悪かった事後アンケートは研修時間内に回答するよう促したため、全員からの回答を得られた。アンケートでは事前学習に関する提案もあり、企画会議の質の向上に向けて、次年度以降検討したい。 また、受講生の中にはGlobal Weekの学生スタッフも数名含まれていたが、研修終了後、Global Week企画の一環としてはどうかとの助言をもらった。
協 力 団 体	認定NPO法人 GLM インスティテュート



事業名	ビッグイシュー講演会
日時	2022年7月13日(水)18:30～20:00
場所	青山キャンパス17号館17410教室、オンライン（Zoom）ハイブリッド形式
参加人数	対面15名、オンライン18名（うち学生19名、教職員14名）
内容	対面とオンラインのハイブリッドで実施。「ホームレス問題とビッグイシュー日本の活動について」をテーマに、貧困問題の背景とビッグイシュー日本の取り組みについて講演いただいた。また、渋谷駅でビッグイシューの販売を行う販売者の方からホームレス状態に陥った経緯や思いが語られ、貧困問題の構造的課題を学ぶ機会となった。 当初は対面での実施を予定していたが、開催前に相模原所属の教職員や学生からオンラインでの参加希望があり、ハイブリッドでの開催に変更した。
成果	学生だけでなく教職員、特にコミュニティ人間科学部教員の参加が多く、関心の高いテーマと内容であった。講座終了後も数名の学生がゲストを取り囲み質問攻めにしていた。 アンケートの回答では、ビッグイシューを知っていたが今まで声をかけずらくて買えなかったが、販売者の生の声を聞くことができ、次に見かけたら声をかけたい。といった回答が複数あり、ホームレスへの偏見や差別の軽減がみられた。その他、ホームレス問題は貧困問題の氷山の一角に過ぎないことなど多くの気づきが得られたよう。関心ある学生がいた分、貧困問題について学生が取り組める活動を今後検討していきたい。
協力団体	有限会社ビッグイシュー日本



事業名	防災ボランティア講習
日時	2022年12月7日(水) 18:00～20:00
場所	相模原キャンパス F305 教室
参加人数	5名(申込6名:学生4、教職員2)
内容	防災運営教材「HUG」を用いたワークショップ。避難所で次々と起こる出来事を疑似体験しながら、避難所の運営と役割について学んだ
成果	受講生全員が避難所運営の疑似体験に真剣に取り組んでいた。教材は小学校を想定した避難所運営であったが、施設を大学と置き換えることができる内容であったので、本学での災害時の対応を考える上でも役立つ講習であったと思う。また、相模原市中央区で開催される防災フェスティバルへ参画する学生が受講しており、防災に対する理解を深める良い機会だったと思う。 以下、参加者からのアンケート(抜粋) ・現在の学校での防災教育のお話は、自分が学生だった頃と比べて隔世の感があって 興味深かったです。 ・ワークでは、予期せぬ事態が次々に起こって、なかなかうまくいかない部分もあったのですが、「こういうことが起こり得る」ということを、実際に避難所の運営に あたる立場にはならなかったとしても、知識として知っていると役に立つ事はある と思うので、受講して良かったです。
協力団体	神奈川県立綾瀬高等学校 岡山 倫也 先生
(当日の様子)	
 	

事業名	こども・若者支援研修
日時	2022年11月10日、11月24日、12月8日(木)18:30～20:00
場所	青山キャンパス 17406 教室
参加人数	11月10日:5名(共催団体関係7名) 11月24日:8名(共催団体関係10名) 12月8日:8名(共催団体関係10名)
内容	広尾中アフタースクール事業の支援に関する学びの機会の一環として、NPO 法人ピアサポート ネットしぶや(以下、ピアサポ)との共催により、こどもと若者支援をテーマとした研修を全3回実施した。各回のテーマと講師は以下のとおり。 11月10日(木):「育ちからの若者理解」武田信子氏 11月24日(木):「子ども、若者の今」神林俊一氏 12月8日(木):「支援とは何か」築地律氏 それぞれの回で、いまの若者が抱える課題に対する社会的状況の変化や実践を学び、参加者同士のディスカッションから、居場所づくり支援に取り組むにあたって必要な視座を高める機会となった。

成 果	広尾中アフタースクールボランティアに参加する学生やこどもの支援に関心の高い学生が主に参加した。全3回通して参加する学生は3名程度であるが、テーマへの関心の高さが伺えた。共催団体のピアサポから声をかけた関係者（団体に登録しているピアサポーターや、こどもテーブル団体のつながり）も参加し、世代間を超えて、学生と地域の方々と共に学ぶ機会とすることができた。今回の研修での学びをもとに、広尾中のボランティアをはじめ、実際の活動へ反映する仕組みや成果検証も検討していきたい。 以下、アンケート回答一部抜粋 ・大人が先回りして危険を取り除く視点も重要ではあるが、子どもがやってみたいこと、子どもにとって意味があると思うものを創造できる自由を用意する視点が素敵だと思った。（11/10の回） ・街の中でこどもが自由に遊べる場所が昔より減っていることや、今の「遊び」がサービス化されて特別なものになっていることに、こどもを取り巻く今と昔の環境の変化があることを知った。（11/24の回） ・リスク要因の高い人だけを狙って直接声掛けをすることは難しいと私も考えていたが、問題に対して色々な人がいる場である方が解決できることが増えるという考えが腑に落ちた。（12/8の回）
協 力 団 体	共催：NPO 法人ピアサポートネットしづや 協力：一般社団法人ジェイス

事 業 名	学生×子どもの居場所づくりセミナー
日 時	2023年2月23日（木・祝）14:00～16:30
場 所	オンライン
参 加 人 数	受講者 17 名（うち青学生 6 名）、参加団体 10 団体 14 名（うち青学生 1 団体 2 名）
内 容	学校外での子どもたちの居場所となる子ども食堂や無料学習支援等の活動について、その基礎知識を学ぶとともに、実際に子どもの居場所づくりの活動に取り組んでいる団体の方々からお話を頂くことで、学生たちがこうした活動に参加するきっかけとなる場として開催した 1. 子どもの居場所とは 講師：相模原市社会福祉協議会子どもの居場所相談員 鈴木愛樹代氏 2. 子どもの居場所活動紹介 【活動紹介をされた団体（ゲストスピーカー）】 ・おかげさん子ども食堂（鈴木健一さん） ・メダカのお弁当（鈴木雄大さん、鈴木佳奈子さん） ・ふらっと。（青山学院大学学生団体 Polaris）（岡田さん、川崎さん） ・こども広場ウェルカム（豊田さん） ・かけはし（藤田さん） ・くすのき広場（吉澤さん） ・おひさま（六田さん） ・てらこや食堂ラッキーズ（関さん、古谷さん、安藤さん） ・さがみはら未来塾（西村さん） 3. 参加者によるグループワーク 4. グループワークで話し合われたことの共有
成 果	昨年度に引き続き、当センター協力事業としてオンラインで実施した。本学からは Polaris の 2 名も含めて 8 名の学生が参加した。また桜美林大学、沖縄大学、北里大学、相模女子大学、多摩大学、和光大学といった他大学の学生等も参加した。グループワークの時間では、学生が地域の団体・大学生と繋がることができた。今回登壇された団体をはじめ、今後学生たちの地域での活動参加につながることを期待したい。
参加者の声	・子供とかかわる際に特に気を付けていることなど、これから学習支援などをやってみようかなと考えている自分にとって有益な事をたくさん教えていただけました。 ・子どもの居場所づくりを行っている団体がこんなに多いことに驚いた。また、基礎知識を知ることができたほか、実際に活動に携わっている方と交流ができて新たな発見がたくさんあった。

参加者の声	・子ども食堂や学習支援の団体の説明が特に印象に残りました。今回参加するまで子ども食堂や学習支援でどのようなことをしているのかがわからなかったのが、今回のセミナーを受けてどのようなことが行われているのかが具体的に知ることができ、子ども食堂や学習支援のボランティアに参加したくなりました。 ・各団体がどのようなことに取り組んでいるのかが具体的なことを知ることができた。
主催団体	主催：相模原市 実施：社会福祉法人相模原市社会福祉協議会
	

事業名	Global Week 企画 「ウクライナ支援を考える～学生のボランティア活動の経験から～」
日時	2022年10月1日(土) 15:00～17:00
場所	青山キャンパス 17309 教室及びオンライン
参加人数	36名(対面14名、オンライン22名) 属性：学生16名、教職員18名、卒業生2名
内容	AOYAMA GAKUIN Global Week 企画として、同年6月に日本財団ボランティアセンター主催のウクライナ避難民支援ボランティアプログラムに参加した学生2名(国際政治経済学部国際政治学科2年 知念大虹さん、理工学部物理学科1年 正木篤志さん)による報告会を開催した。大宮先生による開会祈祷、飯島先生による開会あいさつの後、ミニレクチャーとして協定校であるキウ国立大学の江川裕之先生にウクライナ情勢についてご講演いただいた。学生発表の後には質疑応答時間を設け、参加者からの質問も踏まえて議論を深めた。国際センターの小松先生の閉会挨拶をもって報告会は終了した。 参加者への事後アンケート(N=19)では「とても満足」「満足」が9割以上を占め、参加者の期待に応えた内容であったと思われる。
成果	アンケートの「印象に残ったこと(自由記述)」で多かったコメントは次の通り(全文は別添参照)。 ・避難民の中に口マ人が多かったという話 ・大戦時は日本が侵略国であったこと ・本当の意味での支援対象者とは、を考えるきっかけとなった ・ニュース報道とは異なる現実を知ることが出来た また、登壇された江川先生、学生の知念君、正木君に対して長文のメッセージが多数寄せられ、参加者ひとり一人の胸に深く刻まれる発表であったことが伺えた。 シビックエンゲージメントセンターとなり初めての学内2センター協働イベントであったが、開会あいさつを飯島センター長が、閉会あいさつを小松国際センター長が担ったことで、両センターの協働イベントであることをアピールすることが出来た。また、当日はハイブリッド形式での開催であったが、綿密な事前打ち合わせにより表立ったトラブルもなく執り行うことが出来た。

協力団体 国際センター



日本財団ボランティアセンター主催 “The Volunteer Program for Ukraine” に参加して（学生報告）

青山学院大学からは前頁の Global Week 企画の報告会で発表した 2 名の学生の他、もう 2 名同プログラムに参加している。この 2 名のボランティア活動報告については、体験談という形で本誌に掲載する。

報告者：国際政治経済学部国際経済学科 2 年 伊藤 俊輔
派遣期間：8 月 1 日～8 月 17 日（グループ 3）

私は 2022 年 8 月に日本財団が主催している The Volunteer for Ukraine の Group3 に参加させていただきました。このボランティアに参加させていただいたきっかけは、青山学院大学のシビックエンゲージメントセンターからのお知らせ発信でした。学生ポータルへお知らせが来ていることに気づいた私は、すぐに応募を決意しました。ロシアによるウクライナ侵攻が 2022 年 2 月に始まり、刻一刻と変化するウクライナ情勢を心配していた私はメディアなどで流れてくる情報だけでなく自分の目で少しでも確かめたい、そして私がウクライナ避難民の一助になるならと思い応募させていただきました。ボランティアとして派遣されることが決まってから渡航するまでは正直不安が大きかったです。

実際の活動については情勢が刻一刻と変化しているため直前までわからないこと、避難民の多くは英語を話さずウクライナ語やロシア語を話すという言語の壁があるということです。しかし、そのような不安はすぐに解消されました。ボランティアに参加したメンバーにロシア語を話せる人がいたり、他のボランティア団体にロシア語やウクライナ語の通訳を頼むことができたからです。ボランティア同士で協力、協働することの大切さをより実感しました。

ボランティア活動以前はこのウクライナ情勢についてただニュースを眺めるだけでしたが、実際にボランティア活動をしたことにより少しでも当事者意識を持つことになりました。例えば最近岸田首相がウクライナに電車で向かったというニュースを聞いた際、自分がボランティア活動をしたプシェミシルの駅が映っていたことでウクライナ情勢を自分ごとのように感じました。そして将来的にも戦争であったり飢餓であるような不条理であったり理不尽のような状況になった人たちを支援するような仕事や活動をしていきたいと考えています。

報告者：法学部法学科 3年 西 陽太郎
派遣期間：10月4日～10月20日（グループ7）

私は現在紛争と人権に関わる国際法について学んでいる。しかし、今回のロシアによるウクライナへの武力攻撃に関してのニュースを目にする時、それを単なる情報としてしか消費出来ず、直接的には傍観者でしかいられない自分自身に歯痒さと無力感を感じていた。ウクライナへの武力攻撃によって人権を侵害されている人々の力になれることはないかと考えていたところ今回の募集が目に残った為、この身ひとつで出来ることのあるのであればと思い参加を志願した。

私は学部で「現場」の視点に立つこと、「当事者意識」を持つことの重要性を学んだ。従って、現地では自分がしたい支援ではなく、相手が本当に求めている支援は何なのかを最優先に考え行動することを意識した。

活動中には忘れ難い出来事が沢山あったが、避難してゆく子どもについては特に印象に残っている。ポーランドとウクライナの国境である Medyka という町では、国境通過の検問がある場所で暖かいスープを提供するなどの活動を行なった。そこにはウクライナからの難民を乗せた大型バスが1時間に一本以上昼夜を問わずやって来たと、どのバスも例外なく子どもを乗せていた。想像してみても欲しい。ぬいぐるみを抱いているような歳の子どもの何時間もバスに乗り、深夜3時に見知らぬ土地へ連れられてくる現状を。私が派遣されたのは10月だったため、夜は気温が0℃近くになる日もあった。その現状を目の当たりにしたとき、胸が痛むと同時に今回の武力攻撃が如何にウクライナの人々の人権を侵害しているのかをはっきりと認識した。

また、私は遙か離れた国である日本の学生が参加する意義について考えながら活動をしていたが、ウクライナの人々と触れ合い、感謝されたとき、今回のウクライナ危機がウクライナやヨーロッパのみの問題ではなく、この世界に暮らす私たち人類全体の問題であるのだということを彼（女）らに伝える一部に私になれたと感じた。ここに日本人の学生である私が遠く離れたヨーロッパの地で支援活動を行うことの意義を見出すことが出来た。また、この意味において、「当事者意識」を体現出来たとも感じている。

しかしその一方で、ボランティアの限界も感じた。人的・物的・予算的資源には限りがある。武力攻撃開始から既に1年以上経つ現在、世間の関心は当初と比べて下がっているようにも思われる。そのような中で人道支援活動がいつまで続けられるのかという点に懸念がある。また「現場の視点」のみの不十分さも感じた。ウクライナの人々が直面している厳しい現状を前にして、私に出来ることはせいぜい食事を提供したり、お話をしたりすることだけであつた。私が「現場」にいただけではその現状を根本から変えることは出来ないのだとはっきり認識させられた。

このような体験を通して私は学ぶ意義を再確認した。確かに人道支援活動を行うことには大きな意味がある。しかしこの状況を根本的に変えるためには、関心を持ち続けること、そしてより広く大きな枠組みで物事を考えることも同時に大切である。その意味において、大学で机に座り国際法と人権を学ぶことは大切だと改めて感じさせられた。私には将来国際法の専門家として国際機関で働くという目標がある。そのためにも、残された学部生活においても様々なことに関心を持ち、沢山のことを学び、有意義な時間を過ごしたい。



（写真はすべて日本財団ボランティアセンター提供）

各種サポート制度

青山学院大学シビックエンゲージメントセンターでは、青学生や教職員向けの活動を支援する様々な制度を設けています。

「災害・復興支援活動に対するサポート制度」

地震や台風、豪雨など大規模自然災害にかかる災害および復興支援ボランティア活動に参加する学生に対して、経済的負担を軽減することを目的に、活動地までの旅費補助を行う。

2022 年度利用件数 1 件

補助活動内容	活動日
Youth for Ofunato の 3.11 周年行事の事前準備にもしもプロジェクト青学として参加。岩手県大船渡市三陸公民館で活動	2023 年 2 月 4 日～2 月 5 日

「教職員ボランティア活動補助プログラム」

教職員の自発的な社会活動への参加を促進するため、社会活動に参加した教職員に対し、条件を満たした場合、交通費の一部支給など、費用補助を行う。

2022 年度利用件数 1 件

補助活動内容	活動日
コロナ禍での都庁下での食料品配布	2022 年 8 月 27 日

「ボランティア・社会貢献プロジェクト・サポート制度（通称ボラサポ）」

新しいことへの挑戦やこれまでの活動を発展させたいという、青学生や教職員が主体となって実施するボランティア・プロジェクトを応援するための助成金制度。

2022 年度はコーディネーター伴走型で新規のプロジェクトに取り組む「スタートアップコース」と、これまでの活動を発展させることを目的とした「ステップアップコース」の 2 つのコースのプロジェクトを募集した。

2022 年度採択プロジェクト

スタートアップコース 2 件（申請件数 4 件）

プロジェクト名	助成金額
共生社会実現へのメイクアッププロジェクト	25,445 円
あらとう～innovation around 20～スタートダッシュ企画	111,796 円

ステップアップコース 3 件（申請件数 4 件）

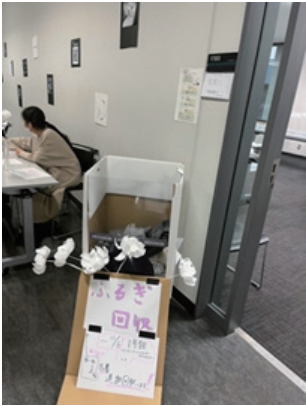
プロジェクト名	助成金額
Let' s open new doors!	56,460 円
古着回収プロジェクト「北タイに幸服を届けタイ」	68,800 円
ペットボトル灯籠プロジェクト「未来を灯そう～越喜来 2023～」	300,000 円

【スタートアップコース】

プロジェクト名	共生社会実現へのメイクアッププロジェクト
実施期間	青山学院大学青山キャンパス教室
実施場所	2022年10月22日(土)
活動概要	大学生が日常的に行うメイクを通じて知的障がいのある方と交流し、ノーマライゼーションや共生社会の理念を体現する機会を作ることを目的として、学生団体「LapizMoga」メンバーによる学内でのメイクアップイベントを開催した。
成果・展望	チラシの配布過程や企画ミーティングでは、渋谷区の知的障がいのある方が通うA型・B型の就労支援事業所を訪問し、活動の説明を通して各事業所や団体がどのような支援機能を果たしているのか知ることが出来た。 当日は8名の知的障がいのある方とその保護者が参加し、ボランティアスタッフ5名が参加者とペアになり、各々が気に入ったメイクアップや帽子の工作づくり、撮影会などを通してインクルーシブな空間を楽しんだ。



プロジェクト名	あらとう～innovation around 20～スタートダッシュ企画
実施期間	2022年10月28日～30日
実施場所	青山学院大学青山キャンパス
活動概要	学生団体「あらとう～innovation around 20～」のスタートダッシュプロジェクトとして、同年代の若者に向けたエシカル消費の理解啓発活動を実施。環境に対するアパレル産業の課題を知り、アクションを起こすことを目的に、古着寄付や青山祭でのCCPフラワー（古着を原料とした造花）の作成・展示・販売を行った。青山祭終了後は、シビックエンゲージメントセンター前に古着回収BOXを1週間設置し、学内で集まった古着をリサイクル倉庫に運搬した。

成果・展望	当初の計画よりも数を減らしての商品販売となったが、青学生やその家族など来客者とのコミュニケーションを通して取り組みへの理解を促し、完売することができた。また、古着回収は目標の150kgが集まるまでSNSや他イベントを通じて継続していく予定。SNSでの発信に力を入れたことで、SNS上でのやりとりが増え、団体の活動紹介などもスムーズにできるようになった。プロジェクト開始以前に比べて、より多くの人に大量生産・消費の裏に潜む社会・環境問題や解決策を伝えることができた。新規メンバーには、次に企画するイベントの準備活動に参加してもらい、より多くの同年代に向けた啓発活動を行っていく。
 	

【ステップアップコース】

プロジェクト名	Let's open new doors !
実施期間	2022年12月4日
実施場所	特急かいじ・八王子市こども科学館
活動概要	学生団体「ひらけ、PEACE!」による子育て中の保護者のレスパイト（休憩）の提供と、小学生の社会経験、大学生へのボランティア機会を目的とした、大学生と小学生での八王子市こども科学館への外出企画を実施した。
成果・展望	金銭的な面で普段なかなか利用できない特急を移動手段としたことで、特急に乗車すること自体も子どもたちにとっての社会経験にすることができた。また、こども科学館では、五感を使った体験や宇宙シュミレーターで科学を身近に感じてもらい、プラネタリウムの鑑賞を通して、東京ではなかなか見られない満点の星空を感じてもらうことができた。事後アンケートや振り返りからは、活動に参加した子ども同士が仲良くなり、活動後に家族ぐるみでの付き合いが生まれたという声や、他の子達も初対面でありながらも関係を築くことができ、社会性の育成につながった。今後の展望は、よりレスパイトの必要性を伝え、子どもたちにさまざまな体験を提供し、安定して活動を開催していくが求められる。



プロジェクト名	古着回収プロジェクト「北タイに幸服を届けタイ」
実施期間	2022年12月1日～2023年2月28日
実施場所	相模原キャンパス構内
活動概要	地球共生学部教職員・学生有志と北タイ・チェンライの山地民支援団体「ルンアルン・プロジェクト」と連携したプロジェクト。2017年に地球共生学部の学生がタイ留学中に行った現地調査をもとに、現地からのニーズが高い衣服を送るため、相模原キャンパス内に衣服の回収ボックスを設置し、回収した衣服を北タイへ届けた。
成果・展望	学生がPR用のポスターを作成し、相模原キャンパスの学生・教職員から衣服回収を行い、計10箱分の秋冬物の衣料を北タイへ発送し、山地民の方々に届けることができた。今後も活動を通じて、教職員・学生・校友のつながりを一層深めていく。




プロジェクト名	ペットボトル灯籠プロジェクト
実施期間	2022年11月1日～2023年3月12日
実施場所	岩手県大船渡市三陸町越喜来地区
活動概要	東日本大震災から12年となる3月11日から12日にかけて、岩手県大船渡市三陸町越喜来地区の周年行事「未来を灯そう～越喜来2023～」の開催に向けて、地域住民とともにペットボトル灯籠による鎮魂と未来へのメッセージを込めたパネル作成、地元高校生との合奏、写真展、防災の企画等を実施した。 プロジェクト始動から7年、地域のお祭りとしては久しぶりに地域住民が会場へ来場する形での開催となり、盛大なイベントとなった。
成果と展望	イベントには将来の地域の担い手となる地域の高校生が企画から準備までの全過程で関わり、多くの担い手現役世代と交流し、共にプロジェクトを展開していくことができた。これにより、将来世代と現役世代間の繋がりが生まれ、地域コミュニティの強化と地域活動の持続可能化へと繋がった。企画参加者数(述べ)は341人。イベントには100人以上の住民が参加したことに加えて、多数の児童・学生も参加したことで、幅広い世代が協働し、実現したイベントとなり、震災犠牲者への鎮魂・追悼、越喜来未来像の共有、多世代間コミュニケーションを行うことができた。 今後も「住民参加型」の可能性を模索し活動に反映していくことを目指す。



「AOGAKU ボランティアネットワーク」

シビックエンゲージメントセンターでは 2020 年度から学生ボランティア団体と繋がり、団体の活動を促進させる目的で AOGAKU ボランティアネットワークを立ち上げています。

このネットワークには学友会組織に所属しない学生任意団体も含まれ、2022 年度は青山・相模原両キャンパスで 14 団体の登録がありました。

＜青山キャンパス＞

TsunAGU ボランティア愛好会	青山学院大学動物愛護団体きすあに
青山子ども会	しぶっこ
学生団体 Youth for Ofunato	国際政治経済学部公認団体 SANDS
グリーンバード青山学院大学ゴミ拾い愛好会	STUDY FOR TWO 青山学院大学支部
アイセック青山学院大学委員会	Lapiz MOGA
あらとう ～ innovation around 20 ～	

＜相模原キャンパス＞

fan × fun 学生ボランティア愛好会	青山学院大学 SIVA ボランティア愛好会
-----------------------	-----------------------

＜青山・相模原キャンパス＞

MF3.11 東北応援愛好会

＜2022 年度の主な実績＞

- ・ 4 月に青山・相模原それぞれのキャンパスにおいて「学生ボランティア団体合同説明会」を開催
- ・ ZoomPro アカウントの無償貸出（7 団体）
- ・ 外部助成金や研修情報の提供
- ・ 共同倉庫（部室）スペースの提供
- ・ センターフリースペースの提供

青山スタンダード科目

サービス・ラーニング科目への協力

青山スタンダードの科目として開講されている、サービス・ラーニング科目に対して、シビックエンゲージメントセンターでは、主に科目の紹介・広報、地域での活動受け入れ先との連携・コーディネートを行った。また昨年度に引き続き、授業終了後も各団体での活動を継続する学生へのフォローアップの取組みとして、After Service-Learning の取組を行った。

【2022 年度 サービス・ラーニング科目の実施概要】

サービス・ラーニングⅠ（青山キャンパス 前期）

「グローバル時代の社会課題」（外と内の両面から）をテーマにして、サービスの視座と姿勢を学ぶことを目的とし、国際協力団体として主に子どもたちを支援する3団体、青山学院初等部との協力のもと実施した。各団体のニーズによって多様なサービス活動を実施し、海外の拠点とのオンラインでの活動や SNS 等を活用したアドボカシーにも取り組んだ。

サービス・ラーニングⅠ（青山キャンパス 前期）

サービス活動とは何かを学んだ上で、3つの団体のゲストスピーカーの講義と活動参加を通して、社会課題に取り組む現場への理解を深めた。フードバンク、地域の子ども支援、アジア・アフリカからの農業指導者研修の活動の中から活動に参加した。コロナ禍で、活動日程や内容の変更が重なりつつも、リモートでできる取り組みやインタビューを試みた。

サービス・ラーニングⅡ（青山キャンパス 前期）

社会の課題をビジネスの手法で解決することを目指すソーシャルビジネス（社会的企業）をテーマに、問題解決へのアプローチについて学んだ。実際に取り組んでいる3つの団体・企業からのゲストスピーカーの講義と、学外での活動を通して理解を深めた。

サービス・ラーニングとしてのボランティア活動

（青山キャンパス 前期）

外国につながる子どもたちへの学習支援の取組を通して日本社会における「多文化共生」の課題について理解を深めた。近年増加している多様なルーツや背景を持つ子どもやその家族が地域社会で暮らし、教育を受ける環境づくりを支えている3つの団体での活動に参加した。

サービス・ラーニングⅠ（相模原キャンパス 夏期集中）

「被災地に学ぶ」をテーマに、東日本大震災で被災した岩手県宮古市での活動を中心に行った。宮古市内での行事への参加をはじめ、宮古市長や地域住民の方々との交流から、震災後のまちづくりのあり方や、今後の防災教育について理解を深めた。

サービス・ラーニングⅡ（相模原キャンパス 春期集中）

前期の活動に引き続き、「被災地に学ぶ」をテーマに、東日本大震災で被災した岩手県宮古市での活動を中心に行った。宮古市教育委員会の協力を得て、市内4つの小学校を訪問し、ワークショップを通じた交流や、児童の防災教育の活動と一緒に参加した。3月11日の宮古市の東日本大震災追悼式では、来場者の案内や会場設営に携わった。

サービス・ラーニングⅢ（青山キャンパス後期）

今年度から開講となった「サービス・ラーニングⅢ」では、カンボジアでの様々な教育現場に実際に立ち、現地での活動を通してサービスとは何かということを考え学ぶ10日間となった。プノンペン郊外の村にあるフリースクールでの授業実践を中心に、経済発展や開発が盛んな都市や地域社会の現状、日本での就労や進学を目指す若者たちとの交流、内戦の歴史について触れる機会となった。



After Service-Learning (サービス・ラーニング授業後の実践) での学び

「学び」を共に創る

国際政治経済学部 国際コミュニケーション学科 2 年 山田華子

活動先：社会福祉法人 さぽうと 21

多文化共生と学習支援の両方に関心がある私にとって、サービス・ラーニングの授業を通じ難民支援団体のさぽうと 21 と出会えたことは大きな財産です。実習では日本に住む難民的背景をもつ方々の勉強を 1 対 1 でサポートしました。関わった子どもたちのことをもっと知りたいという思いから、実習期間終了後も活動を続けさせていただきました。

オンライン教室での支援や対面教室に通う中で、大学生が小中高生の学習支援に関わることの意義を見出すことができました。まず、子どもたちと年齢が近いためすぐに打ち解け、心理的な圧力を減らすことができます。また、自分が数年前に小学校や中学校で学んだ内容を反復することが効果的な指導方法のヒントになっています。一方でサービス・ラーニング勉強会では支援者と学習者の間に「非対称な力関係」が生じてしまうとの指摘があり、はっとしました。その後は大学生という立場に甘んじず、子どもたちが本当は理解していないのに「わかった」と言ってしまうようなブレッシャーを与えていないか常に気にかけるようにしています。

「学習」という非常に重要な領域に支援者側の力量が影響してしまうことに対し、ずっと葛藤しています。それでも活動が続けているのは、自分だからこそできることを探そうという考えに至ったからです。進路に関するアドバイスをしたり、日本の歴史をわかりやすく伝えたり、漢字の意味を教えたりと、日本で育つ中で自然に得た経験が意外な場面で役に立つと知りました。子どもたちにとって最も必要な学びと自分の持っている知識をフレキシブルに融合させながら、楽しさや安らぎを感じられる瞬間を一緒に作っていきたくて強く思います。

大学生の私がネパールの子どもと関わる意義

教育人間科学部 教育学科 3 年 鶴岡里沙

活動先：エベレスト・インターナショナル・ジャパン (EISJ)

前期のサービス・ラーニングの授業では、ネパール国外で世界初のネパール人学校である EISJ のプリスクール（未就学児対象）で保育のお手伝いをしました。活動を通して、海外にルーツを持つ子どもたちのコミュニケーション不足の課題が見えました。それは、日本社会での多様な人たちとの出会いが少ないからかもしれないと思いました。EISJ は幼児から高校卒業までの教育課程が用意されています。一貫して通う場合、同級生は基本的に変わらないこと、また、一つの学年が 20 人程度であり、高校卒業まで新たな人との出会いが限られてしまう可能性があるのではないかと思います。

このような状況にある EISJ に学生の私が参加することの一番の意義は、子どもたちに普段関わらない人とのかわり合いを提供できることだと思いました。EISJ の子どもたちが日本人の大学生と関わることは多くないと思います。子どもたちのコミュニケーション能力の向上の手伝いや将来について考える良い機会の提供につながると嬉しいと思いました。

また、EISJ の活動を通して今まで知らなかったネパールの文化や温かい人柄を知ることができとても楽しく感じました。これからは様々なサービス・ラーニング活動やコミュニティへの参加を通して自分の知見を広げたいと思うようになりました。後期は他の活動との兼ね合いで活動はできませんでしたが、これまでの経験を通して、今後は、特に長期入院している子どもや障害の

ある子どもと関われる活動をしたいと考えています。子どもたちのコミュニケーション不足というのは、海外にルーツを持つ子どもたちに限ったことではなく、コロナ禍の今日、すべての子どもに当てはまるのではないかと考えています。

未来を担う子どもたちの橋渡し

文学部 英米文学科 2 年 石井萌子

活動団体：NPO 法人 ACEF（アジアキリスト教教育基金）

主にバングラデシュへの教育支援を行っている ACEF の活動に参加し、青山学院学初等部のクラスでバングラデシュの子どもたちの時間割や遊びなどを紹介した後、同じ年の子どもたちに向けて手紙を書いてもらった。途上国という位置づけの国だが「かわいそう」と思わせないように考慮し、また、どこかの国の誰かと日本の子どもたちという「多対多」としてではなく、遠い国で同じように暮らしているお友達がいるという「一対一」の関係も意識してもらえるように、宛名には現地のクラスの子どもの名前を書くようにした。書き終わった手紙を回収する際に、ある生徒から「ちゃんと渡してきてね」と言われ、そのまっすぐな言葉から、想像以上に異国のお友達を身近に感じてもらえていたと気づかされた。

このようなサービス・ラーニング（SL）は、NPO の役割や意義について考えるきっかけともなった。はじめは、果たして授業を行うという活動が団体のためになるのかと疑問に感じていた。また、実際に訪れたことがない国にも関わらず授業を行うという自身の役割にモヤモヤ感も抱いていたため、SL 終了後に ACEF のスタディーツアーに参加した。現地の小学校を訪れ、子どもたちがキラキラした目で手紙のやり取りを喜んでくれている姿を目の当たりにすると、SL を通して大学生の私たちがジョイントとなり、異国の小学生同士を、団体のビジョンにある「共に生きる」という対等な関係でつなぐ役割を担っていたのだと実感するとともに、その子どもたちの教育の場を支えるという団体の必要性も強く感じた。一方で、寄付等の支援に頼られ続けては、相手国の自立のためにはならないとも思われ、寄付ではなく、現地で学校運営のための資金が賄えるような仕組み作りも必要だと考えられた。ただ、NPO は未来を担う子どもたちに交流の機会を与え、精神的な豊かさをもたらすような役割も担えると感じ、直接的な支援ではなくとも、長期的に友好関係や親近感を持つための橋渡しとなれる存在だと思えた。今後も、常に課題も探りながら、対等な関係で協力できるような活動に関わっていきたい。



青山スタンダード科目「ボランティア・市民協働論」の実施

青山スタンダード科目として、「ボランティア・市民協働論」（前期開講）を実施した。各回の多様なテーマのもと、センター長、副センター長ならびに各コーディネーターが話題を提供し、ボランティアやサービス・ラーニングをはじめとした、市民協働について幅広い切り口から社会理解を深めるための講義をシビックエンゲージメントセンターとして初めて実施した。

授業科目名：ボランティア・市民協働論

開講時期：前期火曜 5 限 全 15 回

担当教員：飯島 泰裕 教授

開講キャンパス：青山・相模原キャンパス（ハイフレックス形式）

回	講義テーマ	担当・ゲスト
1	ガイダンス	飯島泰裕教授
2	ボランティア活動と市民協働の理解	飯島泰裕教授
3	青山学院における社会貢献活動と大学ボランティアセンターのミッション	シュー土戸ポール教授、 学生生活課職員（中尾匠吾氏）
4	大学生の市民参画：青山・相模原での実践から	島崎由宇 コーディネーター 三神憲一 コーディネーター
5	グローバルな課題へのアプローチ	佐藤亜希 コーディネーター
6	グローバルな課題と活動	ゲスト：NPO 法人パルシック 高橋知里氏
7	地域社会の課題と活動（青山）	ゲスト：シブヤフォント / 株式会社フクフクプラス 高橋圭氏
8	地域社会の課題へのアプローチ①	島崎由宇 コーディネーター
9	地域社会の課題と活動（相模原）	ゲスト：NPO 法人チーム浅沼屋 浅沼一也氏
10	地域社会の課題へのアプローチ②	三神憲一 コーディネーター
11	正規科目（サービス・ラーニング）での学びと社会貢献	秋元みどり コーディネーター ゲスト：NPO 法人かながわすまいサポートセンター 斐安氏
12	SDGs への理解とアクション	佐藤亜希 コーディネーター
13	ソーシャルビジネス	大宮謙教授
14	リフレクション	秋元みどり コーディネーター
15	総括	全担当者